

「イエスが遣わされるのだから」

ヨハネによる福音書 13:12～20
ヨハネの手紙1 2:6

2026年3月1日
野村 友美 師

<イエス・キリストの弟子>

先週、この呉教会が所属する日本ナザレン教団の年会が行われました。4月から始まる新しい年度に向けて、いろいろなことが話し合われました。その中で、ナザレン教団は「キリストに倣う弟子」であることを大切にしている教団だということと、これからもキリストの弟子を育てていきたいという話がありました。

イエス・キリストの弟子。それは、狭い意味ではイエス様と同じ時代に生きて、イエス様に従った新約聖書の登場人物たち、ペトロやヨハネといった十二人の使徒をはじめ、イエス様に直接出会ってついて行った人たちのことでしょう。そして広い意味では、イエス・キリストを救い主だと信じて、こうやって教会に集まって礼拝している私たち一人ひとりもまたイエス・キリストの弟子です。

「私はイエス様のことは信じているけど、弟子になっただけじゃない」と言いたい方も、中にはおられるんじゃないでしょうか。ですがイエス・キリストという御方は、私たちを普段は放っておいて、必要な時だけ関わられるような救い主ではありません。インマヌエル、「神が私たちと共におられる」という呼び名をもつ救い主として、イエス様は私たち人間の真ただ中にやって来られました。この「インマヌエル」の呼び名のとおり、イエス・キリストは私たち一人ひと

りのすべてに関わって、人生の旅路を一緒に歩いてくださる御方です。それも、私たちの後ろをついて来られるんじゃないで「従ってきなさい」と私たちを招いて、前に立って道を切り開いてくださる救い主です。

だから「イエス・キリストを信じます」と告白するとき、私たちはどうしたってイエス様に 主導権をお渡しして、イエス様について行く弟子として生きることになります。自分勝手な生き方から、イエス様の方針に従う生き方へと方向転換することになります。

「そんなつもり」があろうがなかろうが、イエス・キリストを救い主だと信じる人は全員、イエス・キリストの弟子なんです。そういうわけで、今日の聖書の場面でイエス様が弟子たちに語っておられることは、私たちみんなにとって他人事ではないでしょう。

「あなたがた」とイエス様が呼びかけておられるのは、その時イエス様の目の前にいた弟子たちだけじゃなくて、今ここにいる私たちのことでもあります。さてイエス様は弟子たちに、私たちに、何を伝えようとしておられるんでしょうか。

<「わたしをお遣わしになった方」>

弟子たちの足を洗い終わると、イエス様は改めて過越の祭りの食卓に戻られました。そして食事の前に、「わたしがあなたがたにしたことがわかるか？」と弟子たちに問いかけて、彼らの足を洗ったその意味を伝え始めました。「わたしのことを『先生』とか『主』と呼ぶあなたたちは、わたしを模範にきなさい。」そうイエス様はまず弟子たちに教えておられます。

罪にまみれた一人ひとりに触れて、それぞれの汚れも恥もきれいに洗ってくださる

神様の愛と憐れみをあらわすために。誰ひとり見捨てたりしないで、すべての人を愛し抜く神様の愛の深さと広さと忍耐強さを、目に見える形で伝えるために。

神様がどういう御方なのかをはっきりと見せるために、イエス様はひざまづいて、弟子たち全員の汚れきった足を洗われました。この「人の足を洗う」という仕事は、当時の奴隷の中でもいちばん低い立場に置かれていた異邦人奴隷の仕事だったそうです。

誰よりも低いところに自分を置いて、目の前の人を大切に扱うために働く。これが神様の愛のあらわし方だ、とイエス様はご自分の行動で弟子たちに伝えたんです。そして、イエス様を「先生」「主」と呼ぶ弟子たちにも、同じように神様の愛をあらわして生きようとイエス様は教えました。

弟子は師匠のやり方や振る舞いを教わって、それを自分の身につけて、師匠のようになることを目指すものです。主であり師匠であるイエス様が弟子たちの足を洗ったのだから、弟子たちもお互いに足を洗い合わなければならない、とイエス様は言われました。目の前の人を大切に扱って、神様の愛をあらわすために。

まずは一緒にイエス様について行く仲間どうし、お互いを愛して大切に扱いなさい。「それが私の弟子であるということだ」と、イエス様は教えておられるんです。この話をイエス様がなさったのは、十字架にかかれる前の晩のことでした。弟子たちと一緒に過越の祭りの食事をした後、エルサレムの郊外にあるオリーブ山のゲッセマネの園で、イエス様はイスラエルの権力者たちによって捕えられます。

彼らを手引きしたのは、イエス様の弟子の一人だったイスカリオテのユダでした。そして他の弟子たちもみんな結局は、イエス様を見捨てて

逃げてしまいます。それでも、いえ、だからこそイエス様はこの時「あなたがたも互いに足を洗い合いなさい」と弟子たちに話されたんです。

信じてきたものが壊された、従いきれずに裏切った、挫折してしまった。そんな思いに押しつぶされそうになりながら、自分たちも捕まるかもしれないと怯えながら、弟子たちはイエス様の復活までの三日間を過ごすこととなります。後悔や恐怖や絶望に飲み込まれてしまわないように、お互いを大切にして支え合いなさい。

この世の権力や悪の力に支配されないように、神様の愛をお互いにあらわし合いなさい。そういう励ましを込めて、イエス様は「お互いに足を洗い合いなさい」と弟子たちに教えたんでしょう。そのためにも、弟子たちが何に気をつけなくてはいけないかが、続けて語られます。

「はっきり言うておく」というイエス様の前置きは、元の言葉では「アーメン、アーメン」という繰り返しです。本当に、本当に、ここが肝心なところだよ、とイエス様が弟子たちに言い聞かせたこと。

それは「僕は主人にまさらず、遣わされた者は遣わした者にまさりはしない」ということでした。「僕」つまり召使いが主人を超える立場になることはないし、遣わされた人が遣わした人より偉くなることはない。当たり前といえば当たりの話ですよ。でもイエス様としては、「アーメン、アーメン」と前置きするほど大事なことだったんです。

どうしてイエス様はここで、こんなに力を込めて当たりのことを弟子たちに言い聞かせておられるんでしょうか。

「弟子であるあなたたちは、師匠であり主

であるわたしより偉くなることはない」と戒めておられるのでしょうか。

確かに、ここでイエス様が言うておられることは、弟子たちとご自分の関係を「しもべと主人」「遣わされた者と遣わした者」にたとえているように聞こえます。ですが話が進んでいくと、イエス様がおっしゃっているのはどうも、それだけではなさそうです。

ただの師匠と弟子という関係とは違って、イエス様と弟子たちの関係には、イエス様を遣わした御方である神様が関わっている。そのことを、イエス様は「わたしをお遣わしになった方」という言い方で、弟子たちに示しておられます。

「しもべと主人」「遣わされた者と遣わした者」という関係は、イエス様と神様の関係でもあるんです。

「わたしは自分の意志ではなく、
わたしをお遣わしになった方の御心を行おうとする」
(ヨハネ 5:30)

「わたしは自分勝手には何もせず、
ただ、父に教えられたとおりに話している」
(ヨハネ 8:28)

そんなイエス様の言葉を、ヨハネの福音書はいろいろな場面で伝えていきます。ご自分でそう宣言されているとおりに、イエス様は神様の思いとやり方に全面的に従っておられました。

つまりイエス様の弟子であるということは、イエス様を通して神様の言葉と思いに全面的に従うということになるんです。しもべが主人を超える立場になることはありません。遣わされた人が遣わした人より偉くなって、自分勝手に判断してふるまうこともありません。

同じように、イエス様の弟子がイエス様をとり超えて、イエス様とは違うやり方で、イエス様以上に神様に従うことはできません。

「このことがわかり、そのとおりに実行するなら、幸いである」とイエス様は言われました。

ただイエス様を模範にして、神様の愛をあらわして生きるなら。あなたたちはどんな時でも、どんな状況に置かれていても、幸せだ。そうイエス様は、弟子たちに約束してくださっているんです。

<イエスが遣わされるのだから>

それでもいつの間にかイエス様じゃなくて、自分の好みや都合にあうような誰かや何かを模範にして、「これが神様の御心だ」と思い込んでしまう。それが、私たち人間のどうしようもない傲慢さだと言えるでしょう。

ユダがイエス様を裏切ってしまったのも、まさにこの傲慢さからだったと思います。イエス様のやり方は、自分が思う救い主にふさわしくない。このままイエス様について行っても、自分の理想は叶えられない。イエス様よりも自分の方が、神様の思いをわかっている。そういうユダの傲慢さに、悪魔の声が囁いたんです。「そうだよ、お前のほうがイエスより賢いじゃないか」と。ユダが選り取った道は、彼を「幸い」にはしませんでした。

イエス様が十字架で処刑されて、自分が何をしたのかを理解したユダがどうなったのか。ヨハネの福音書は何も語っていませんが、新約聖書の他の文書はユダがたどった悲惨な結末を伝えていきます。

そうならないように、どうにかユダも悔い

改めて幸いに生きてくれるようにと、イエス様はきっと祈るような気持ちで、彼の裏切りを予告なさいました。

事が起こる前に、今、言うておく。これから起こる出来事によって、「わたしはある」ということをあなたたちが信じるようになるために。この少し不思議なイエス様の言葉は、ユダも含めた弟子たち全員に向けられています。

「わたしはある」というのは、旧約聖書が伝えている神様の名前、神様の名乗りです。ユダが見失ってしまったこと。イエス様の言葉と行動のすべてが神様のものだということを、これから起こる十字架と復活の出来事によって、弟子たちは思い知るようになります。

今はまだわからなくても、その時にはきっとわかるようになる。だから今日のことをしっかり覚えていなさい、とイエス様は念押しなされたんです。

どんな状況の中でも、弟子たちがイエス様を模範にして支え合っていけるように。後悔も恐れも乗り越えて、神様の愛に従って生きられるように。きっとこの時のことを思い出しながら、この場にいた弟子たちの一人、ヨハネの名前で書かれた手紙が、後に続く私たちにこう呼びかけています。

「神の内にもいつもいると言う人は、
イエスが歩まれたように
自らも歩まなければなりません。」

(ヨハネの手紙1 2:6)

最後にもう一度「アーメン、アーメン」と繰り返して、イエス様は弟子たちに宣言なさいました。わたしが遣わすあなたたちを受け入れる人は、わたしを通して神様を受け入れることになる。わたしが遣わすあなたたちには、神様が

いておられる。だから自信をもって勇気を出して、わたしを模範にして生きていきなさい。

このイエス様の宣言は、今この時を生きる弟子たち、私たちにも向けられています。私たち人間の真ただ中の、いちばん低いところまでやって来られる神様の愛を、イエス様が目に見える形で示されました。そのイエス様を模範にして、神様の愛をあらわして生きるようにと、イエス・キリストの弟子たちはこの世界に遣わされています。

誰よりも低いところに自分を置いて、すべての人を大切にするために働かれたイエス様とまったく同じようには、きっと誰もできません。失敗も後悔も、恐れも迷いも、私たちはきっと何回でも味わうでしょう。それでも、イエス様が遣わされるのだから。イエス・キリストの弟子たちは、どんなに不完全でも、失敗しても迷っても、イエス様を模範にして神様の愛をあらわして生きる一人ひとりです。

神様がどんなに愛しておられるかを、目の前の人に伝えるために。誰もが神様から愛されていることを、この世界で一緒に生きるすべての人に届けるために。

私たちはそれぞれの人生を通して、神様の愛の深さと広さと忍耐強さを他の誰かに伝えるために、イエス様が遣わしておられるイエス・キリストの弟子なんです。

私たちの言葉と行動と生き方のすべてを、イエス・キリストの弟子として神様が導いてくださいますように。

お祈りいたしましょう。